

空

平成30年2月28日発行

第16卷1号

通巻第77号

空



2018・2・3

**SORA** 77号

日向ぼこ

柴田 佐知子

鬼やんま規則正しく折り返す

母支へ母の故郷へ蘆の花

空つぼとなるまで歩む大花野

熔岩原のうねりのままに秋の蝶

討たれたる馬も祀りて紅葉谿

惨殺の絵巻収むる紅葉寺

北はもう雲が塞ぎぬ氷頭鱈

月光に座し脈打たぬ身となりぬ

影落すものなく冬田ひろがれり

その端に堆肥のぬくき冬田かな

百峰に百柱の神寒波来る

雄鶏の突つ立つてゐる霜日和

母ときにこの世を離れ日向ぼこ

橋脚に渦の生まるるクリスマス

聖夜劇賢者三人もつれ出づ

極月や鮮魚に値札貼り付きて

忘年会情死に遠き顔ばかり

鳥籠の鳥は宙吊り実南天

どん底にまだ底ありと木菟鳴けり

毛糸編むこの世に誰も居なくても

福岡 高倉 和子

投身も感受する色紅葉川

衣擦れと雨の音のみやや寒し

暮れ残る石の祠や夕芒

大鳥居はまつてゐたる秋の空

秋雨の砂に染みゆく早さかな

手づかみで塩を足しぬる芋煮会

焼芋の新聞紙まで香ばしく

闇汁に見えてくる顔ありにけり

東京 中田みなみ

玲瓏と初日を底に五十鈴川

太箸や歩み切りたる伊勢詣

冬満月上げて宿場の版画めく

街道の冬杉途切れ廓跡

柔かな初雪のせて投句函

番傘の雪重くなる旅の夢

凧や無人の駅に漫画本

雪原に後姿の一輛車

福岡 柴川志津子

熊崎 荒井千佐代

冬の日や開戦告げし無線塔

終着駅前に展ける秋の海

うす氷片窃せて汲む神の水

跳ね橋の閉づれば逢へる秋の雨

梅見茶屋あかき前掛け前結び

跳ね橋閉づ秋潮に影落としつつ

たつぷりと筑後の空や麦二寸

一村を川の貫く秋暑かな

瀬を越ゆる雛の片袖千切らるる

巖流島よりの終便秋夕映え

川芋に親子のありて仏生会

港町すずめ啄む尾花かな

町良猫にまた子がふえて春の虹

ちぢまらぬ嫁との距離やいわしぐも

流人の島防人の島鳥帰る

年寄と年寄の猫日向ぼこ

埼玉 服部 早苗

みどりごを絹にてつつみ菊の寺

長考に出入りいくたび鉦叩

晩秋や薄紙重ねゆく齡

立冬や尻ポケットにスキットル

神前に半歩押しやる七五三

旅愁かな礎に座れば尻冷ゆる

地下空洞月にあるとや大根煮る

銃眼の三角四角ゆきほたる

福岡 岸 洋子

傾きしままたぎり出す芋煮鍋

手摺みの葱やきのこや芋煮会

瀧不動へ爪先上り葛匂ふ

惚け封じの小鈴よく鳴る柿日和

うすら寒石の佛に鉄の匂ひ

灯台へ道落ちてゆく赤のまま

高稲架を解きて日本海まとも

待宵やななめに舳ふ屋形船

北九州 深川 淑枝

広島 戸栗 末廣

旅に出るラシヤの密なる冬帽子

水音の近きものより末枯るる

割る櫓の匂ひはじてて山の寺

十六夜の寺より赤ん坊の声

もの枯るる響きの中の秘仏かな

草の絮降りゆくどこも新天地

淡墨の冴えや屏風の松林図

軒先にあれこれ吊し日の短か

冬の虹消え残欠の百済琴

枯れ急ぐ裏の山より獣ごゑ

淡海のをき日暮や鮎舟

鬼の子に声を掛くれば揺れにけり

紅葉濃き一枝は鬼女の挿頭なる

一木に鳥の賑はふクリスマス

坂町に酢莖を買ふや比良暮色

子の家の近くに移り十二月

福岡 角野良生

稜線に一番星や川床料理

台風に海の回廊ありにけり

立秋の証のほどの鰯雲

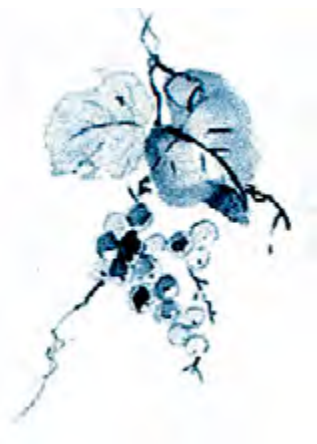
鳴き終へて腰落としけり法師蟬

みの虫の顔出してゐる日和かな

放生の稚魚のかたまるばかりなり

橋に来て川霧川をあふれけり

ぶちまけしかに一面のどんぐり





糸田 宮井 知英

淡き陽の集まつてゐる枇杷の花

山寺の障子垂麻色猿が来る

嬰の顔誰彼に似て冬ぬくし

縁側に母ゐるやうな小春かな

小春日や筵に乾く物の音

大阪 田岡 千章

名月や姿焼きてふ川の魚

赤とんぼ代り映えせぬ日の暮るる

相槌の一粒づつの黒葡萄

金木犀生涯息を吐きて吸ふ

自転車に子と荷を釣瓶落しかな

千葉 原友子

拾ひたる一枝を杖に秋遍路

ひとつづつ剥がすほかなしみのこづち

落葉踏む音落葉より乾きをり

着ぶくれの天辺にある美貌かな

にんげんに表や裏や焚火の輪

長崎 松尾 龍之介

かなしみは爪の先まで落葉踏む

近づきて去りし一会の一帰燕

穂すすきや老いて狭まる選択肢

まつさらの紋付を着て鶴来る

冬の虫声平らかにけり

岡垣 田中とし江

冬もみぢ木目の著き堂巡る

小春日や厩の裾を猫歩く

魂の落ちゆく深さ紅葉谷

貨車ゆきし鉄路の匂ひ秋の蝶

干しかけの白菜投ぐる喧嘩かな

粕屋 秋 千 晴

狩られたる猪の首へと電気鋸

分配の肉を一切れ狩の犬

切り分けて狩の残骸山に帰す

猟期果つ猪の頭骨壁に掛け

落葉掃く塵取りに犬座り来る

福阿 あさなが捷

年男夜明けの海へ投げ込まる

長老の合図に獅子の暴れ出す

神あまたこぼるる程に宝船

急逝の友より来たる年賀状

七種や濃き色ばかり愛でらるる

兵庫 青 木 朋 子

錦秋や古き帯買ふ城下町

秋天へ太鼓のばちを突き上ぐる

秋うらら数分おきに来る市電

伊予ゆけば子規にまた会ふ柿日和

汽車を待つ秋の没日に真向ひて

大阪 井上和子

大鯉の鱭の金色神無月

金秋へ花嫁降す人力車

城垣へ免れ一人の冬日向

通草の実がらんどどうなり吹かれをり

仕掛檻覗き枯野を引き返す

糸島 小林朱夏

雄鶏が駆け降りてくる露の花

初雪や折鶴に息吹き入れて

皺どれも笑ひ皺とし初化粧

大灘へ流されてをり喧嘩風

田楽の串を数へて笑ひ合ふ

福岡 山内碧

日にまみれ稲刈終へし農夫立つ

その下は坑道走る稲の波

展示さるる石炭ひとつ冬に入る

遠出せぬ日々よ冬日の故郷へも

おほかたは忘れゆく夫賜日和

太宰府 山本則男

走り書きあまた残して通明忌

しづけさは鴉の贄より始まりぬ

先頭は見えぬ高さや鷹柱

一切を弾き尽くしてはちすの実

田の息を吐き出すごとく落し水

福岡 矢野百合子

朝顔の悔なき形にしぼみけり  
鳥影を宿して沈む冬夕日  
鷹渡る湧くごと空に現れて  
冬の水かかり艶増す地蔵尊  
敗荷無念の言葉蔵したる

大野城 森田明成

釣瓶落し家一軒に山迫る  
魯田は鳥のあそび場夕日影  
故郷のなじめぬ町名そぞろ寒  
露の世の縁だいに暮しをり  
鳥よりも人驚かす案山子かな

京都 天谷翔子

夕刊をきれいにたたむ無月かな  
笹舟を流す鬼灯ひとつ乗せ  
側にゐたし蓮の実の飛び尽くすまで  
揺れ動くものに心とコスモスと  
銃弾の跡おほひたる蔦紅葉

直方 曾根富久恵

曼珠沙華を掠め白鷺立ちにけり  
柔らかき日差しの中に栗を剥く  
秋夕焼母の遺品を持ち帰る  
地球ごと落ちゆく釣瓶落しかな  
霊柩車をもてあます路地花八ツ手